

第二十九回（最終回）

ある寺の和尚さんが私の顔をじっと見て、

「貴方は地獄のような苦しみを体験されたことがありませんね。しかし、いまは実におだやかに仏様のようないいお顔をしておいでだ」

と、いわれたことがある。

これまでのいきさつを話すと、「なるほど」と感嘆された。このとき人間、生きるも死ぬも紙一重かもしれない、と人生を悟った気分になった。

一九七七年（昭和五十二年）ニュージーランドで通訳をつとめたK・ロバートソン氏へわれわれ捕虜仲間一同が、日本への招待状を送った。

ロバートソンは喜んで日本へやってくるくれた。東京の藤田保、斎藤智一、両氏の斡旋で品川プリンスホテルに四、五十人が集まり、盛大な歓迎会を開いた。

この後約一か月半、藤田、斎藤、田口対也、豊川の後藤重一氏らが付き添い、日本観光を楽しみながら山形、名古屋、神戸、広島島の捕虜だった仲間との再会をはたした。

彼は日本の家庭で畳の部屋に泊まり、沢庵、納豆を食べる親日家だった。戦前、日本の高等学校で先生をしていた人なので、日本の生活文化、習慣、日本人のものの考え方、人情、気質などにも精通しており、また人柄も良い紳士であった。

当時、日本人捕虜から信頼され、みんなから慕われていたので、捕虜だったわれわれ仲間がお世話になつたお礼にと皆が力をあわせてお世話をした。

日本の土産をたくさん持って帰った彼は、あれから二、三年後、つりと音信が途絶えてしまい心配した。

われわれフェザーストン捕虜収容所から帰国できたものの悲願として、異郷の地で「く」なつた同胞の慰霊碑を建てたいと以前から念じていた。

しかし、厚生省も外務省も、建てた後の管理に問題がある、として許可が出ないでいた。ところがほどなく彼の地からフェザーストン収容所近くのニュージーランド・フェザーストン・メモリアルビクニックエリア内に戦争記念公園を造りたい、についてはこの地域での戦争関係国だったニュージーランドをはじめオーストラリア、米国、日本などへ寄付を要請してきた。日本への割当はベンチとテーブルであった。この機会に、慰霊碑も建てさせてほしいとわ

われわれが希望すると、小さいスペースならオーケーと回答があった。

われわれニュージールランド戦友会(元・陸海空の捕虜)と南星会(元・十一、十二設営隊の捕虜)が寄付金を出し合い、ベンチ、テーブルの費用のほか、『鎮魂』のプレートと芭蕉の句「夏草やつわものどもが夢の跡」のプレート、そして桜の苗木をまとめて送った。

除幕式は一九七九年(昭和五十四年)に地元市長、日本大使、市民によって盛大に行われた由だったが、このときわれわれは行かれず、残念であった。

七年後の一九八六年(昭和六十一年)十二月十二日名古屋の後藤清氏の発案でついに墓参りに行くことになった。最初は十人ぐらいの予定であったが都合がつかず、結果は後藤氏、呉の安達敏夫氏、私の三人になつてしまった。あまり少ないので私は家内を連れて行くことにした。

ニュージールランド墓参

フェザーストンはウェリントンから北方約七十キロのところにあつて、人口三千人の町である。

通訳のロバートソン氏はやはり亡くなつておられた。生前、彼が日本へ来てくれたときに、皆で歓迎できたことがせめてもの救いだつた。

墓参りの当日は市長や地元民の参列まであつて、しめやかに営まれた。

鎮魂の碑の前で、安達氏は白装束に袴姿でおこなう祈禱をされた。われわれも共に亡き同胞の冥福を祈つた。

われわれがニュージールランドへ墓参に行くと、現地の新聞は全頁をさいて大きく報道した。その時の新聞をご覧きたい。

Featherston prisoner-of-war camp revisited

Former adversaries meet as friends



FOLLOWING the table are former prisoners Zensky Sobeki and Eigoji Gotoh and Mrs. Sobeki.

フェザーストン捕虜収容所跡は、すでに民間に払い下げられて牧場になっていた。ある一隅には、いまだにわれわれを取り囲んでいた鉄条網が赤錆がつすたかく山に積まれてあった。

食堂跡のコンクリート土台があった。お湯を沸かした釜の一部が朽ちて転がっていた。当時収容所を出る間際に、いろんなものを埋めたものが出てきほしくないかとあちこち掘ってはみたが、何も出てこなかった。

われわれが座り込み、発砲事件のあった広場を探した。多くの戦友を一度に亡くした場所を何とかして探し当てたが、草が一面生えていていまは見当がつかなかった。

またしく、夏草やつわものでもが夢の跡であった。

軍曹だったトンプソン氏の家で、現地の人たちとの交歓会が開かれた。そこへ当時十八才で病院の看護兵をしていたというステン・カール氏が大事そうに、ぺらぺらな紙に描かれた鉛筆画を五枚持って来た。中に鼻の高い外人の女の横顔と、ストリッパーの姿が描かれていた。その二枚の左下にはまきれもなく私のサインがあったのには驚いた。富士山の下に偽名の「TANAKA」とあった。自分の絵のような気がしなかったが、私が負傷をしてアンザック特設病院に入院中、暇にまかせて雑誌から引き写したものでらしい。青春時代の自分に突然出くわして、嬉しいような恥ずかしいような戸惑いを感じた。

「これは私が描いたものだ」

トンプソン

「そうかお前か。これは家の宝だ」

と、いつ何度も握手をするだけで、返してくれようとはしなかった。

しかし、画家でもない日本人捕虜の描いたものを、ニュージブラント人がこうまで大切にしてくれているとは、一体なんの因縁であるうかと不思議に思った。

その後、彼は本物は返せないがと、トンプソンを私の許へ送ってきてくれたので、それが今度は私の宝になって現在も所持している。

お国柄や顔かたち、皮膚のいろがちがっていても、お互い人間同士、人情には変わりがない。トンプソンをつくつくおもった。



「著者略歴」私の歩んだ道

一九二二(大正十年)六月十五日、東京に生まれる(西歳)

〔昭和〕

一九二七(二年) 四月 東京府下北豊島郡中新井村、村立豊玉尋常高等小学校入学

一九三六(十一年) 三月 同校高等科卒業

四月 練馬区向山町富士フィルム現像部入社

九月 麹町区丸ノ内東京中央郵便局電信課

一九三八(十三年) 四月 同局貯金課出納員

一九四二(十六年) 五月 志願兵として、横須賀海兵団入団

十月 海軍工作学校入校、第七期普通科練習生(八か月教育に変更)



昭和15年当時



昭和17年5月
横浜海軍航空隊残留部隊配属当時



昭和16年5月横須賀海兵団入団当時
演習時、班員と共に。前列左から3人目が私。

一九四二(二十七年)五月 横浜海軍航空隊残留部隊配属・三等工作兵二週間後サイパン經由ラバウル本隊入隊

六月下旬 本隊前進。特務艦(最上川丸)にてソロモン諸島ツラギ基地へ進出(ツラギタナンボコガブツ島周辺の基地)

八月七日早晩 米軍機の銃撃を受ける。米海兵一個師団タナンボコ島上陸後、一旦撤退(八月八日昼間 米軍機の爆撃後、駆逐艦からの艦砲射撃による爆風でタナンボコ島の壕の入口が埋まり、宮川と二人だけ、五十日近く閉じ込められる)

九月 壕脱出、無人島へ泳ぎ渡る。翌日、西フロリダ島へ泳ぎ渡る

十一月三日、十日頃 現地人に捕まる。ツラギへ護送、二日間位ガソリン倉庫に入れられる

十一月十七日頃 ガダルカナルへ護送

十二月頃 ニューカレドニア經由でニュージーランドへ護送

十二月末 ニュージーランドのウエリントンからフェザーストンに護送

一九四三(十八年)二月二十五日 フェザーストン捕虜収容所発砲事件

一九四五(二十年)十二月三十一日 帰還船LSTでウエリントンからグアム島經由、小笠原諸島父島寄港

一九四六(二十一年)二月三日 浦賀へ上陸(元・工作学校の復員局で五泊)

二月八日、九日 自宅へ帰還自宅の農業を手伝いはじめる

十二月 農地改革による、農業委員会地区補助員

一九四七(二十二年)四月四日 田島トモエと結婚

一九五四(二十九年)四月 立教中学校用務員勤務

一九七〇(四十五年)四月 同校事務員に昇格、理科の先生の助手、印刷業務

一九八六(六十一年)十二月 ニュージーランド・フェザーストン慰霊碑墓参

一九八七(六十二年)三月 立教中学校定年退職

〔平成〕

一九九三(五年)四月「地獄からの生還」自費出版

あとがき

あれから五十年が経ち、いまさら戦争の話してまないとと思われるほど長い歳月が過ぎてしまいました。その間、私だけの「自分史」として誰にもあまり体験したごとのない、戦争というものの悲惨さを書き残しておきたいと念じていましたが、私にはやはり「捕虜」になっていたという負い目が長くのしかかっており、書くのをためらっていたのです。

一緒に帰還した捕虜仲間の一人は、いまでも酒が入ると肉親である親から村には戦死した人の家族が沢山いる。うちの息子が捕虜になっていたなどと、不名誉で恥ずかしくて話せない。お前などわたしの子とは思わないから、どこかよその土地へ行って暮らせ」と勘当されかけた、と私によく云っていました。こんな訳ですから、私の戦争体験は息子たちにさえほんの一部分しか話をしていませんし、孫などは映画の時代劇くらいにしか思っておりません。

今では同年兵の会合などで、誰かから冗談に「お前は捕虜だったのか」と云われても、「何をいってやがる、こっちは内地でのほんとは暮らしていたのとはちょっとばかり違うんだ」と言い返せるようになりました。

私は復員後、一九五四年(昭和二十九年)に立教中学の用務員に就職しましたが、一九八七年(昭和六十二年)の退職まぎわに社会科の先生から、戦場の弾をくぐった体験者は君しか学校にいないのだから」と請われて、二年生の生徒たちに太平洋戦争の体験を話したところ、その感想文に「いい冒険をしましたね」というのが沢山あって、思わずアツと驚きました。

あの頃、荒くれ男どもが勇敢に線上で活躍するアメリカ映画が流行っていたせいもあったでしょうが、このままではガタルカナル、ニューギランドで悲惨な死をとげた同胞、戦友たちのためにも黙ってはいられません。真実をありのまま伝えようと、堅く心に誓いましたが、そう思いながらもまたたぐ間に数年がたつてしまいました。

このたび、ようやく念願がなつて私の拙い筆による戦記を一冊の本にまとめることが出来ました。これもひとえに、蔭ながら私を励ましてくださった、多くの好意ある方々の協力があったればこそと存じております。心から厚く感謝申し上げます。

完

一九九三年四月 櫻井甚作

長い間、愛読ありがとうございました。